

ニワトリの獣医師と呼ばれてたくて 2

～一懸命から一生懸命へ～

白田 一敏

獣医師のタマゴになるまで

真つ暗なトンネルから抜け出すために、筆者はニワトリの獣医師を目指すことにした。筆者の決心は、両親をはじめ、養鶏場の社長など身の回りにいる大人たちを喜ばせることになってしまった。彼らのそれぞれ

の思惑が次第に大きな期待へと変化していくのを、子供ながらに筆者はヒシヒシと感じ取っていた。筆者の父親の思惑：息子が獣医師になって、ガツポガツポと稼げば自分の老後は安泰だ、といった単純なもの(筆者の思考も同次元であったが……)。

養鶏場の社長の夢：経営者らしく「自分が大きくした農場が子供たちに魅力的であり、自分の子供たちと農場で育ったスタッフの子供たちが力を合わせて夢のような農場を運営できたらどんなに素晴らしいだろう」(折に触れて集まった子供たちを前に熱っぽく将来の構想を語っている若き社長を思い出す)。

当時の養鶏場の規模は、一〇万羽程度も飼っていれば大規模と呼ばれていた。筆者が小学六年生になった頃、高床式二階建鶏舎。二階にケ

ージがあり、そこにニワトリが飼育されて、一階に鶏糞が落ちる仕組み)と呼ばれる当時としては巨大な鶏舎が登場した。装置産業としての採卵養鶏業変異の皮切りであろう。

当然のことながら器が大きくなっても、そこに魂を入れなければ、本当にタダの箱となるだろう。いくら設備を機械化(デジタル化・オートマチック化)しても、働く人々が優れたアナログ感覚をもって管理しなければ、手から水がこぼれるように利益が逃げてしまう。「仏作って魂入れず」の状態といえる。規模が大きければ大きいほど、この遺失した分は莫大な金額になる。筆者は最近になって、ようやくこのことを痛感できるようになってきた。

子供たちに夢を語っていた社長の心情は、今になってみると理解できる。しかし、当時の筆者の心は「この真つ暗なトンネルを何とか抜け出したい」。そんな気持ちで心の大部分が占められていた。

こうして人生の方針は決まったものの、獣医師のタマゴになるまでの

道のりは常に父親からのプレッシャーとの戦いだった。

高校に進学が迫った頃のことである。

「一敏、おまえ高校に行くのか?」と父。

「……」

何を言われているのかがわからない。

「高校は義務教育じゃないゾ。もし行きたければ、行かせて下さいとお願ひするんだナ」

「行かせて下さい。お願いします」面食らって筆者は返答した。

「わかった。じゃあ、S高校(地元の進学校)に行け。それ以外はダメだ」と父。

当時すでに、子供たちはチャホヤされるのが当たり前の風潮になっていた。学習塾に行くことは当たり前。学習塾に通うのに、親が送り迎えをするといった過保護なケースも見られ始めた頃である。こんなことを羨ましいとは思わなかったが、高校に進学するのは当たり前だと思っていた筆者は非常に「親父、何を考えてやがる」と、その理不尽な扱いに大いに憤慨したものである。

父親になった今では、父の行動は

決して非難されるばかりではない、と感じられる。父が昭和一桁生まれ

で特別頑固だったから、少しは歪んだ嫉だったかもしれないが…。

簡単に諦めるわけにはいかない

サッカーに明け暮れてはいたものの、筆者にとって高校生活の最大の目標である「大学入学」が片時も頭を離れない。「どんな大学があるのか？ あるいは、どの大学が最適なのか？」といった情報を全く欠く筆者は、父親に「ドクターK(前回

で触れたように、筆者がニワトリの獣医師を目指すキッカケとなった方)に、このことを質問してくれ」と頼んだ。ドクターKは、小さな紙に、

【国立大学：◎北大、◎東大、◎岐阜大、◎鳥取大、公立大学：大阪府大、私立大学：△麻布大：】

といった内容を親切にメモした小さな紙切れをくださった。

この瞬間だった。これまでの「ニワトリの獣医師になりたい」という漠然とした思いが、具体的な目標に変化したことを感じたのは!! その意味ではドクターKは人生最大の恩師と言える。この時から、メモを書き付けた紙切れはお守りのような存

在となった。筆者が精神的にくじけそうになった時、あるいは、気持ち奮い立たせなくてはならない時などは、何度も何度もそのメモを見返したものだ。これは大学を卒業するまで机の引出しに入っていた(なんせお守りですからね)。

具体的な目標が定まったところで、獣医師になるための大学のことをいろいろ調べてみた。結構狭き門であることにビックリさせられた。

これらの大学は、全国に国立・私立を含めるとわずか一五校しかない。

生活事情を考慮すると、当然選択肢は国立大学のみとなる。国公立大では一大学当たりの定員は三〇人余り、全国に一〇校なので三〇〇人。

たったこれだけが筆者の選べる門の広さなのである(現在では、国立の獣医科大学を統合して、さらに少なくするという案も出ているらしい)。

また、当時は愛玩動物(ペット)ブームなどもあり、獣医師(犬・猫を対象)という職業は、人気が非常に

高かった。現在でもその人気は維持されている。特に、『動物のお医者さん』という獣医学科の学生を主人公にした少女マンガの影響で、女子学生には人气的だった。筆者が目指していたのは、犬・猫のお医者さんでなく、『ニワトリのお医者さん』であるが、人間以外のすべての動物は、獣医師の守備範囲となる。

もともと親しい犬猫開業獣医師は、『トカゲ・ヘビなどのエキゾチックアニマルの診療は困る』と言っていた。女性志望者はとても勤勉なので、たちまち、合格ラインがアツプするのだ。このため、必要な点数は考えていたものをはるかに上回り、それを知った時の愕然とした思いは忘れられない。

ハードルを越えることが難しいからといって簡単に諦めるわけにはいかない。「一生、毎日毎日、ニワトリに目薬をやるような仕事は嫌だ」と思い、必死になって勉強したのだから。当時を振り返れば、この気持ちは子供ゆえに、の非常に単純なものだった。養鶏場の業務は毎日がワクチン作業ではない。また、努力して会社幹部になれば、良い暮らしもできる。しかし、当時の筆者の原動力は、このような「思い込み」であ

ったことは間違いない。

受験の日、そして嗚呼!! 再出発

必死の努力の甲斐もあって、受験時には、学力では一応勝負できるレベルになっていた。高校三年生の夏を過ぎた頃から、夜の食卓の話題は決まっていた。

「今度の試験は、どうだった?」と父。

「ギリギリで受かりそうなレベルかな」

「そうか。大学受験のチャンスは一回だけだぞ。もし、ダメだったら、ワクチン打ちの仕事だぞ」

「……」

筆者は無言で対するよりない。

当時の採卵育成成場では、大規模になってくるに従って一回の餌付羽数も増加していた。三〇〇羽が五〇〇羽になり、一万羽になり、二万羽になりといった具合だ。加えて筆者の住んでいた関東地方は養鶏場が密集し、鶏病も多かった。対応しなければならぬ鶏病がたくさんある。つまりは、いろいろな種類のワクチンを何回も接種しなければならぬということである。ワクチン作

業の負担が重荷になっていくことは、当時高校生であった筆者の目にも明らかであった。父親の言葉は決して脅しではない。

そんな日常のプレッシャーと戦いながら、受験日を迎えた。「この試験で自分の人生のすべてが決まってしまうのだ」という逼迫したストレスをご想像できるだろうか。気の弱い筆者はこうしたストレス下でとても試験に集中できなかつたのだから。

玉碎。

自分の名前のない合格発表板の前で筆者の目の前は真っ暗、頭の中は真っ白になった。真っ白になった頭でぼんやりと「家出をするか?」。給料をもらいながら大学に行ける防衛大に行くか?と考えていた。この時防衛大へ行っていたら、今ごろイラク戦争に戦々恐々としていたのかもしれないね。

試験結果発表の次の日、家に一人で塞ぎ込んでいると、電話のベルが鳴った。受話器の向こうに聞こえる

声の主は、ドクターK。

「試験失敗しちゃったんだって!？」

とドクターK。

「ハイ……」と筆者。

「そんなこともあるさ。また頑張ればいいサ」

「……ハイ」

考えてみれば、筆者はそれまでドクターKと直接話をすることがなかった。父は、仕事の話をする際に子供を同席させることを嫌ったのである。少々戸惑ったものの、その力強く前向きな口調に一筋の光明を見た思いがしたものだ。

筆者の失敗を知ったドクターKは、父親を長時間説得してくださり、再度チャレンジするチャンスが与えられることになったその場で筆者に電話をくださった、ということを知った。ご自分の口でそれを告げずに、励ます言葉のみ口にされたドクターKの心の内はどんなものであったのか、今もって確認してはいない謎の一つである。

(筆者・(株)ピーピーキューシー 品質管理&生産管理部門長/獣医学博士/獣医師)